

英検「準1級」二次面接試験問題の「素材」と「質問文」の特徴

達川 奎三

草薙 邦広

広島大学外国語教育研究センター

はじめに

本研究の目的は、公益財団法人日本英語検定協会による「実用英語技能検定」（以下「英検」とする）の「準1級」二次面接試験問題の「素材」と「質問文」の特徴を分析することである。文部科学省による大学入学試験における外部資格試験、とりわけ4技能をバランス良く測定できるテストの導入推奨の流れもあり、英検・TOEIC®・TOEFL®・IELTS™・G-TEC・TEAPなどの活用が議論されている。これらの資格試験の中でも英検は、1964年8月に第1回検定が始まり、半世紀以上の日本の英語検定試験では最も長い歴史を持ち、2015年度には3,225,358人が受験し、開始年からの累計受験者数は約1億人に達すると言われている。英検「準1級」は、昨今、注目度の高いCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）では主としてB2からC1レベルであると考えられ、文部科学省は中学校英語教員の敷居点（threshold）として位置付け、その取得を奨励している。このような英検準1級の二次試験問題の「素材」と「質問文」を、2007年度から2015年度までの9年間分のデータを内容（情報）的観点と言語学的観点から分析し、その特徴を明らかにしてみたい。

1. 「実用英語技能検定」（英検）について

1.1 英検の沿革と概要

実用英語技能検定は、公益財団法人日本英語検定協会が実施する英語技能の検定で、1964年8月の第1回検定に始まり、半世紀以上の歴史があり社会的認知度も高く、「英検」の名で知られており、単に「英語検定」と言っても本試験を意味する場合も多い。文部省や文部科学省が長年「認定」あるいは「後援」してきており、中学校・高等学校英語教育との関わりも強く、2級から5級まで（一部準1級）の受験が学校現場でも推奨されている。開始当初は1級、2級、3級のみであったが、1966年に4級が新設され、1987年には準1級及び5級が加わり、さらに1994年準2級が新設された。なお、隣接した級であれば、2つの級の試験を同一試験日に受けることができる「ダブル受験」制度もある。「検定・テストの特徴」としては「コミュニケーションに欠かすことのできない4技能をバランスよく測定することを目的としたテストです。日常会話から社会的な題材まで、受験者の学習段階を考慮した質の高い内容は、問題を解きながら知識を深められるよう工夫されています。」と紹介されている。また、英語学習の初期段階から生涯にわたる継ぎ目のないスコア尺度が必要であり、かつ、そのスコア尺度をあらゆる英語関連の資格・検定試験に共通したものになりたいという考えのもと、2014年9月以降CEFRと関連性をもたせたユニバーサルなスコア尺度「Common Scale for English (CSE)」を発表し、その一層の精緻化を目指している。

1.2 英検「準1級」の習熟度レベル（難易度）

英検1級から5級までのそれぞれのレベルと試験内容（各級の目安）については、同協会HPサイト（<http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/about/>）に説明がされている。「準1級」については、次のようになっている。

習得目標：リーダー（品格）の英語、ライティング、スピーキングを含む4技能の総合力を測定

推奨目安：大学中級程度

出題目安：エッセイ形式の実践的な英作文の問題が出題されます。「実際に使える英語力」の証明として高く評価されています。

また、審査基準や領域（<http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/criteria/>）については次のような記述がある。

準1級

程度：社会生活で求められる英語を十分理解し、また使用することができる。

審査領域

読む：社会性の高い分野の文章を理解することができる。

聞く：社会性の高い内容を理解することができる。

話す：社会性の高い話題についてやりとりすることができる。

書く：社会性の高い話題についてまとまりのある文章を書くことができる。

ここで注目すべきことは、「社会性の高い (social)」というキーワード（コンセプト）である。2級から5級までは次のようなコンセプトがレベル（程度）説明のキーワードとなっており、明らかに高度な英語運用能力が求められていることが分かる。

2級：社会生活に必要な英語を理解し、また使用することができる。

準2級：日常生活に必要な英語を理解し、また使用することができる。

3級：身近な英語を理解し、また使用することができる。

4級：簡単な英語を理解することができ、またそれを使って表現することができる。

5級：初歩的な英語を理解することができ、またそれを使って表現することができる。

（下線・強調は筆者）

「準1級」は、近年注目度の高いCEFR（Common European Framework of Reference for Languages, ヨーロッパ言語共通参照枠）では、主としてB2（実務に対応できる者・準上級者：Vantage or upper intermediate）からC1（優れた言語運用能力を有する者・上級者：Effective operational proficiency or advanced）レベルと考えられる。また、文部科学省は同級を公立中等学校英語教員の敷居点（threshold）として位置付け、取得を積極的に奨励している（Appendix 1 参照）。具体的目標としては、2017年度までに中学校英語教員の50%、高等学校英語教員の75%以上が英検準1級以上を取得するという国の目標が示されている。しかしながら、文部科学省による平成

27年度「英語教育実施状況調査」によると、2015年度時点での達成率は公立中学校が30.2%、公立高校は57.3%である。ちなみにこの目標を達成している都道府県は中学で1県、高校で6県にとどまっている。

1.3 準1級の試験内容

試験内容は、一次試験（筆記とリスニング、90分と約25分）と二次試験（面接形式のスピーキングテスト、約8分）に分かれている。一次試験の「測定技能と検定形式」と素材の「主な場面と題材」は次の表に示すとおりである。（http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/grade_p1/detail.html）

表1 英検「準1級」一次試験の「測定技能と検定形式」

測定技能	形式・課題	形式・課題詳細	問題数	問題文の種類	解答形式
リーディング	短文の語句 空所補充	文脈に合う適切な語句を補う。	25	短文 会話文	4肢選択 (選択肢印刷)
	長文の語句 空所補充	パッセージの空所に文脈に合う適切な語句を補う。	6	説明文	
	長文の内容 一致選択	パッセージの内容に関する質問に答える。	10	評論文など	
ライティング	英作文	指定されたトピックについての英作文を書く。	1	(英作文なので問題文はない)	記述式
リスニング	会話の内容 一致選択	会話の内容に関する質問に答える。(放送回数1回)	12	会話文	4肢選択 (選択肢印刷)
	文の内容 一致選択	パッセージの内容に関する質問に答える。(放送回数1回)	12	説明文など	
	Real-Life 形式の内容 一致選択	Real-Life 形式の放送内容に関する質問に答える。(放送回数1回)	5	アナウンスなど	

表2 英検「準1級」一次試験素材の「主な場面と題材」

主な場面・題材	
場面・状況	家庭、学校、職場、地域（各種店舗・公共施設を含む）、電話、アナウンス、講義など
話題	社会生活一般、芸術、文化、歴史、教育、科学、自然・環境、医療、テクノロジー、ビジネス、政治など

また、二次試験の「測定技能と検定形式」と素材の「主な場面と題材」は次のとおりであり、英語のみでの面接は約8分とされている。

表3 英検「準1級」二次試験の「測定技能と検定形式」

測定技能	形式・課題	形式・課題詳細	問題数	解答形式
スピーキング	自由会話	面接委員と簡単な日常会話をを行う。	-	個人面接 面接委員1人 (ナレーション、応答の内容、発音、語い、文法、語法、情報量、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲や態度などの観点で評価)
	ナレーション	4コマのイラストの展開を説明する。(2分間)	1	
	受験者自身の意見を問う質問	イラストに関連した質問に答える。	1	
	受験者自身の意見を問う質問	カードのトピックに関連した内容についての質問に答える。	2	
	受験者自身の意見を問う質問	カードのトピックにやや関連した、社会性のある内容についての質問に答える。	1	

表4 英検「準1級」二次試験素材の「主な場面と題材」

主な場面・題材		
社会性の高い分野の話題	過去の出題例	在宅勤務、レストランでの喫煙、チャイルドシート、住民運動、キャッチセールス、護身術

1.4 「社会性が高い」テキスト（情報）とは

英検「準1級」では「社会生が高い」話題について英語で理解し産出することが求められるが、ここで扱うテキストジャンル（やり取りする情報）の難易度について確認しておきたい。このことに関わって Brown and Yule (1983) は次のように説明している。

It seems likely that genres which are relatively easy to listen to are those same genres which are relatively easy to produce. We would predict, on this basis, that narratives and instructions would be easier to understand than abstract argument, explanation or justification. (p.85)

また、ジャンルの具体的な分類を3つに大別して、以下のように提示している (p.109)。

1. Static relationships

- (i) Describing an object or photograph
- (ii) Instructing someone to draw a diagram
- (iii) Instructing someone how to assemble a piece of equipment
- (iv) Giving route directions

- 2. Dynamic relationships
 - (i) Story-telling
 - (ii) Giving an eye-witness account
- 3. Abstract relationships
 - (i) Opinion-expressing
 - (ii) Justifying a course of action

これらを視覚化すると下図のように表現できる。

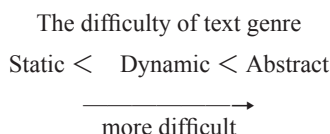


図1 テキスト・ジャンルの難易度

詳述は次節以降に行うが、ピクチャーカードの「ナレーション」は“Dynamic relationships (Story-telling)”，そして後続の「質問文」のやり取りは“Abstract relationships (Opinion-expressing)”のテキスト・ジャンルであり、難易度はかなり高いと言える。

2. 「準1級」ピクチャーカード素材について

2.1 ピクチャーカードの構成

準1級ピクチャーカードは「A4横サイズ、多色刷り」で、受験者に必要な情報としては「5つの指示文」と「4つのストーリー性のあるイラスト」で構成されており、準1級が導入されて以来、ほぼこの形式を踏襲している。日本英語検定協会公式HPの「準1級の過去問・対策」にある二次試験「問題と解答サンプル」には、2009年度第3回カードAが掲載されている。(http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/virtual/grade_p1/pdf/grade_p1.pdf)

(2009年度第3回カードA)

You have **one minute** to prepare.

This is a story about a woman who wanted to stop people from smoking on the street.

You have **two minutes** to narrate the story.

Your story should begin with the following sentence:

One day, a woman was on her way to work.

(下線, 強調は原典のまま)

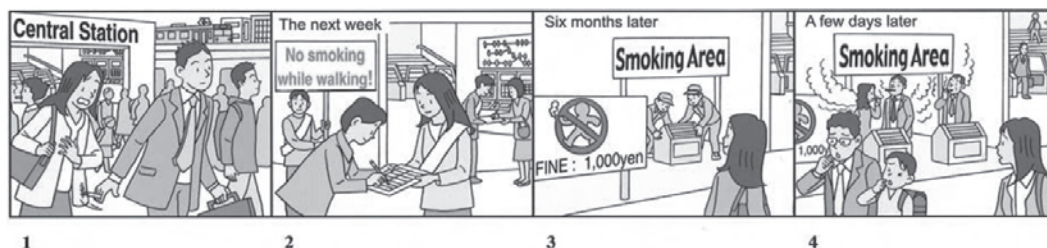


図2 ピクチャーカードの例

1, 3, 4 行目の指示文は毎回同じであり, 2, 5 行目の情報はイラストの意図(情報)をより良く(正しく)理解するために必要であり, これをもとにナレーションの展開を考えることが求められる。

2.2 イラストの話題(キーワード)

2007年度から2015年度までのピクチャーカードに描かれた情報をまとめると表5のようになる。

表5 英検準1級ピクチャーカードの「イラスト内容」と「キーワード」

通し番号	年度-回	カード	イラストの内容	キーワード
1	2007-1	A	家業継承	職業
2		B	駐輪場所	社会
3	2007-2	A	ICT購入と子供の運動	子育て
4		B	レストランでのマナー	社会
5	2007-3	A	仕事と家庭の両立	両立
6		B	社内異動	職場
7	2008-1	A	商店街活性化	商店街
8		B	幼児同伴旅行	家庭
9	2008-2	A	都市での就職	職業
10		B	ダイエットと運動	健康
11	2008-3	A	環境意識の向上	環境
12		B	緊急処置講習	その他
13	2009-1	A	選挙投票率の向上対策	社会
14		B	単身赴任と昇進	職業
15	2009-2	A	休暇とボランティア	休暇
16		B	職業選択	職業
17	2009-3	A	公共の場(通り)での喫煙	喫煙
18		B	子供の遊び場所	社会
19	2010-1	A	公園・道路でのボール遊び	社会
20		B	人件費の削減	企業
21	2010-2	A	親の介護	介護
22		B	住居と家族のコミュニケーション	家庭
23	2010-3	A	商店街活性化	商店街
24		B	住宅購入と給与増	住居
25	2011-1	A	写真家としての生計	職業
26		B	仕事と家庭の両立	両立
27	2011-2	A	子供の遊び場	社会
28		B	ペット保険	ペット
29	2011-3	A	野菜作りと農薬	食
30		B	ハイブリッド車の高価格	環境
31	2012-1	A	退職後の生き甲斐	高齢化
32		B	市長による観光活性化	行政
33	2012-2	A	ゴミ収集と財政不足	行政
34		B	新居購入と遠距離通勤	住居
35	2012-3	A	ICTと学業成績	ICT
36		B	子供の課外活動とケガ	教育
37	2013-1	A	仕事と育児の両立	両立
38		B	家族の野外キャンプ	休暇
39	2013-2	A	環境保護と雇用確保	環境・雇用
40		B	ソーラーパネル設置と家計節約	環境
41	2013-3	A	社内厚生ハイキング	企業
42		B	地産地消の課題	行政
43	2014-1	A	書店売り上げ策	企業
44		B	課外活動と学業	教育
45	2014-2	A	仕事と家事の両立	両立
46		B	エコツアー	環境
47	2014-3	A	カーシェアリングの課題	社会
48		B	飲食店経営と近隣騒音	社会
49	2015-1	A	ホテル経営の効率化	企業
50		B	インターネットでの食品購入	ICT
51	2015-2	A	児童のスマートフォン所持	ICT
52		B	低収益路線と利便性確保	行政
53	2015-3	A	歴史的地域の活性化	行政
54		B	肥満とダイエット	健康

1.2で確認したように準1級の求められる英語レベルは「程度：社会生活で求められる英語を十分理解し、また使用することができる」であり、審査領域は「話す：社会性の高い話題についてやりとりすることができる」と示されており、社会・職場・家庭・地域などで遭遇するであろう実にさまざまな事柄や話題（social issues）を扱っていることが分かる。

また、「イラスト内容」を「キーワード」で分類したものが表6である。

表6 英検準1級ピクチャーカード「キーワード」で分類した「イラスト内容」

キーワード	頻度	%	キーワード	頻度	%
社会	8	14.8	介護	1	1.9
職業	6	11.1	喫煙	1	1.9
環境	5	9.3	高齢化	1	1.9
行政	5	9.3	子育て	1	1.9
企業	4	7.4	食	1	1.9
両立	4	7.4	その他	1	1.9
ICT	3	5.6	ペット	1	1.9
家庭	2	3.7	計	54	
休暇	2	3.7			
教育	2	3.7			
健康	2	3.7			
住居	2	3.7			
商店街	2	3.7			

1.2で述べたように、推奨目安は「大学中級程度」とあり、「環境」「ICT」「健康」「ペット」などの高校生にも馴染みある話題も20.5%（1/5程度）はあるが、「社会」「職業」「行政」「企業」「仕事と家事の両立」「教育」「住居」「商店街（の活性化）」「介護」「高齢化」「子育て」「食（の安全）」といった比較的「大人の目線」から捉えた話題が68.7%（2/3程度）を占めている。（残りの1割程度はどちらとも言えない。）身の回りや日常生活だけでなく、「社会性の高い（socialな）話題」「グローバルな課題（global issues）」についての基礎知識や問題意識を備えておく必要がある。

【代表的な設問具体例】

（社会）

2010-2 B4: Is it acceptable for the media to investigate the private lives of celebrities?

（職業）

2014-2 A3: Do people today change jobs more frequently than people did in the past?

（行政）

2009-1 A3: Should local governments provide more services for the community?

（企業）

2015-1 A3: Do you think that companies spend too much money on advertising?

（仕事と家事の両立）

2010-2 A2: Do you think that married couples share the housework more equally these days?

（高齢化）

2011-1 A4: Will it become more common for people to live with their aging parents in the future?

（食の安全）

2015-3 B2: Should the government introduce stricter food-safety laws for restaurants and supermarkets?

3. 「準1級」質問文 (Questions) について

面接では計4つの質問が出されることになっている。大きく分けて (1) イラストに関連した質問, (2) カードのトピックに関連した内容や社会性のある内容についての質問, の2種類がある。以下, それぞれの種類について特徴を吟味することとする。

3.1 イラストに関連した質問 (質問文1)

イラストのナレーションに引き続き, 4コマあるイラストの一つについて質問が出される。この質問で特徴的なことは, すべてが「仮定法」を用いた問題文であるということである。表7から分かるように, 分析対象54の質問文で would, what, were, picture, If が出現する。例えば, “Please look at the fourth picture. If you were the woman, what would you be thinking?” (2009年度第3回カードA) のような質問文である。2007年度第2回検定のみ “If you were the restaurant owner in the fourth picture, what would you do?” という形式の質問文が出されたが, 意味的な差は全くなく, 以降は “Please look at the fourth picture. If you were the *****, what would you be thinking?” という構文が用いられている。

このため, 「look」「at」「Please」という単語の出現数が52となっている。また, 問題となるイラストは「4」である場合がほとんど(54回中52回)で, イラスト「2」が問題とされたのは僅か2回である(表7)。さらに, この質問文1に用いられたセンテンスの平均語数は16.30語で, 最少語数は2007年度2回検定カードAの13語であり, 最大語数は19語である。

表7 質問文1に用いられた語と頻度 (出現数)

順位	頻度	単語	順位	頻度	単語	順位	頻度	単語
(1)	108	the	(16)	5	husband	(30)	1	wife
(2)	107	you	(17)	5	father	(31)	1	wearing
(3)	54	would	(18)	4	to	(32)	1	student
(4)	54	what	(19)	3	your	(33)	1	second
(5)	54	were	(20)	3	young	(34)	1	restaurant
(6)	54	picture	(21)	3	say	(35)	1	professor
(7)	54	If	(22)	3	mother	(36)	1	owner
(8)	52	look	(23)	3	glasses	(37)	1	next
(9)	52	at	(24)	3	do	(38)	1	mayor
(10)	52	Please	(25)	2	with	(39)	1	give
(11)	52	fourth	(26)	2	president	(40)	1	girl
(12)	47	thinking	(27)	2	in	(41)	1	employee
(13)	47	be	(28)	2	company	(42)	1	decide
(14)	21	man	(29)	2	boss	(43)	1	city
(15)	14	woman				(44)	1	advice

3.2 カードのトピックに関連した内容や社会性のある内容についての質問 (質問文2~4)

3.2.1 質問文2~4の扱う「話題 (トピック)」「主体 (者)」について

イラストに関連した仮定法を用いた質問文1に続き, 質問文2~4はカードのトピックに関連した内容や社会性のある内容についての質問が出される。一つひとつの質問文の内容について「話題 (トピック)」あるいは「主体 (者)」を紐づけし, 集計した情報が表8である。「職場, 企業」「教育, 子育て」「社会問題」「政治, 行政, 政策」「治安」「男女格差」「高齢化」などが上位を占め, これらの小計は95で半数以上(58.6%)を占める。「環境」「ICT」「スポーツ」「交通」「食生活」「健康」などは高校生などにも比較的答えやすい話題ではあるが, 解答では論理的な(logical

な) 理由付けや例示などをする必要があり, ここでも「社会性の高い (social な) 話題」についての基礎知識や日頃からの問題意識が求められる。

表8 質問文2～4の「話題 (トピック)」または「主体」

話題・主体	頻度	%	話題・主体	頻度	%	話題・主体	頻度	%
職場	16	9.88	治安	4	2.47	旅行	1	0.62
教育	15	9.26	男女	4	2.47	法律	1	0.62
社会	15	9.26	食生活	4	2.47	ペット	1	0.62
子育て	13	8.02	高齢化	4	2.47	貧富	1	0.62
企業	11	6.79	健康	4	2.47	南北	1	0.62
環境	8	4.94	メディア	3	1.85	都市	1	0.62
ICT	7	4.32	地域	3	1.85	読書	1	0.62
政治	6	3.70	食品安全	3	1.85	住居	1	0.62
行政	5	3.09	現代人	3	1.85	自然	1	0.62
交通	5	3.09	医療	3	1.85	広告	1	0.62
スポーツ	5	3.09	政策	2	1.23	技術革新	1	0.62
			人権	2	1.23	慣習	1	0.62
			酒	2	1.23	観光	1	0.62
						家庭生活	1	0.62
						音楽	1	0.62
						合計	162	

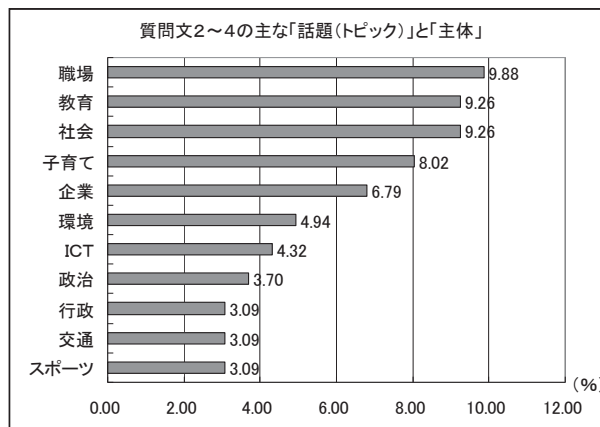


図3 質問文2～4の主な「話題 (トピック)」または「主体」

3.2.2 質問文2～4の言語的特徴について

3.2.2.1 質問文の長さ

質問文2～4は通常, 1つのWh-疑問文かYes-No Questionの形で出される。使用される語数は平均12.94語であり, 最少語数は7語であり, 最大語数は21語である。

7語: Should parents be stricter with their children? 2013年度第1回A-Q2

8語: Should education get more funding from the government? 2014年度第1回A-Q4

21語: Should employees be promoted based on their work performance or on the length of time they have worked for their company? 2010年度第1回B-Q4

21 語 : Do you think that more people will want to work for the government rather than for private companies in the future? 2012 年度第 1 回 B-Q4

また、分析対象とした 9 年間に出题された 162 個の質問文のうち、2 個だけ 2 センテンスでの質問であった、何らかの情報や事実を述べ、“What do you think about that?” と問われている。

These days, more young people from urban areas are interested in working in agriculture. What do you think about that? 2007 年度第 1 回 A-Q3 (20 語)

Some high-class restaurants do not allow customers to bring their young children with them. What do you think about that? 2008 年度第 1 回 B-Q2 (20 語)

3.2.2.2 質問文の表現上の（言語的な）特徴

次に質問文 2～4 の表現上（言語的な）の特徴を明らかにしてみたい。質問文のパターンを以下の表 9 に示すこととする。

表 9 質問文 2～4 の構文的特徴

表現パターン	頻度	%
Do you think ...?	76	46.9%
Should ...?	40	24.7%
Yes/No	35	21.6%
Why do you think ...?	5	3.1%
Which ...?	3	1.9%
What do you think about that?	2	1.2%
How ...?	1	0.6%
合計	162	

“Do you think ...” で始まる質問文が 46.9%（76 個）ほどあり，“Why do you think ...?” “What do you think about that?”などを合わせると、「think」という語彙が使用されている質問文は実に半数以上の 51.2%（83 個）を占めている。次に特徴的なことは“Should ...?”で始まる質問文が 1/5 以上（21.6%）登場することである。これらのことから、準 1 級レベルでは社会に存在するさまざまな事柄についての単なる知識だけでなく、自身の考え（abstract ideas）を根拠に基づいて（logical に）口頭表出することが求められていると言えよう。

さらに、35 個ある Yes/No Questions の文型に注目してみたい。文頭語に焦点をあてると、次のような結果となった。

表10 Yes/No Questions の文頭語分類

表現パターン	頻度	%
Do	11	31.4%
Is	9	25.7%
Are	5	14.3%
Will	3	8.6%
Does	2	5.7%
Can	1	2.9%
Has	1	2.9%
Have	1	2.9%
Were	1	2.9%
Would	1	2.9%
小計	35	

英検公式 HP の解答例などを見ると、“Yes/No.” や “I (don’t) think so.” と答えるだけでなく、2つ(以上)の支持文 (supporting details) が述べられており、自身の主張に説得力を持たせること (logical comments) が期待されている。

また、Yes/No Questions という文型ではないが、「than」「or」などの二者択一を求められる質問文も 9.3% (15 個) 登場する。

表11 選択が求められる質問文

表現パターン	頻度	%
than	8	4.9%
or	7	4.3%
小計	15	

昨今、英語教育界とりわけディベート指導などにおいても言われることであるが、与えられたテーマ (主題) について、自身の (賛否の) 立場を明らかにして、それをサポートする英語力が、英検準 1 級などの上級レベルの面接 (英作文も同様) では求められていると言えよう。

3.2.2.2 質問文に使用される語彙の特徴

次に、質問文で使用される語彙に着目する。分析に使用された 2007 年度から 2015 年度までの質問文の総語数は、大文字小文字による綴りの差を加味する計算方法 (case sensitive) で、延べ語数 (token) が 2,103 語、異なり語数 (type) が 521 語であった。(なお、高頻度語彙上位 150 語の情報を Appendix 2 に示す。) 延べ語数に対する異なり語数の比率 (type token ratio, TTR) は、およそ 0.25 である。TTR は一般に語彙の豊富さの指標とされている。この 0.25 という値は一般的な母語話者が使用する話し言葉に見られる値 (通常 0.6~程度) よりもかなり低いものであり、質問文に使用される語彙はやや制限されたものであると考えられる。

また、これらの使用された語彙の難しさを検討するため、得られた頻度表に JACET 8000 (大学英語教育学会基本語改訂委員会, 2003; 正式名称『大学英語教育学会基本語リスト』) におけるレベル情報を用いた。JACET 8000 は、国内の英語教育研究において、最も一般的に使用され

る語彙リストであり、主に BNC (British National Corpus) の頻度情報を元に、国内における教科書や入試問題などの使用頻度も加味した語彙リストである。JACET 8000 は、1,000 語単位をレベルとして、各レベル 1,000 語ずつ、計 8,000 語を収録している。

異なり語数の計算において、全体 521 語、名詞 226 語、動詞 144 語の 3 種類に分け、それぞれにおける JACET 8000 のレベル情報の分布を調査した (表 12)。また、このデータを棒グラフで可視化したものが図 4 である。

表12 JACET 8000レベルの分布

レベル	1	2	3	4	5	6	7	8	付与不可	計
全体	361 (.69)	65 (.12)	34 (.07)	32 (.06)	8 (.02)	5 (.01)	2 (.00)	6 (.01)	8 (.02)	521
名詞	144 (.64)	36 (.16)	29 (.09)	11 (.05)	3 (.01)	4 (.02)	1 (.00)	3 (.01)	4 (.02)	226
動詞	102 (.71)	15 (.10)	7 (.05)	15 (.10)	2 (.01)	1 (.01)	0 (.00)	0 (.00)	2 (.01)	144

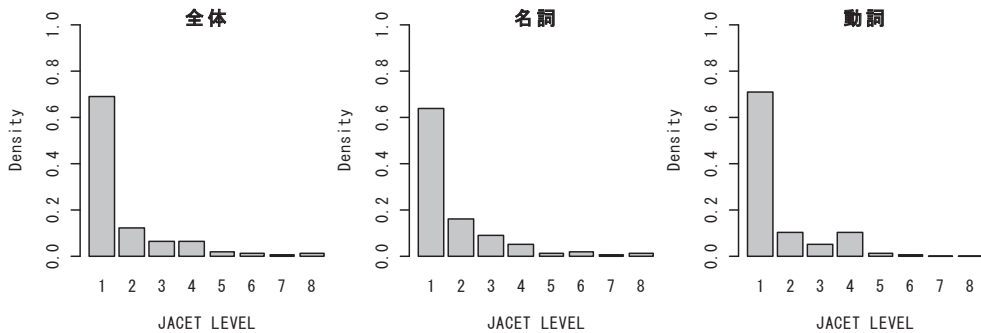


図4 JACET 8000におけるレベルの分布を示す棒グラフ

図 4 より明らかなように、主たる内容語である名詞および動詞においても、大半の使用語彙は JACET 8000 において最も基本的なレベルであるレベル 1 に分布している。また、いずれの種別もレベル 2 までで、およそ 80% のカバー率になる計算であり、語彙の難しさの観点からは、対象となった質問文では、全体的に容易な単語が使用されていると言える。

高レベルの単語は、“garbage” (レベル 8)、“nutrition” (レベル 8)、“stressful” (レベル 8)、“renewable” (レベル 8)、“genetically” (レベル 8)、“housework” (レベル 6)、“workplace” (レベル 6)、“lifestyle” (レベル 5)、“environmentally” (レベル 7)、“celebrities” (レベル 6)、“gambling” (レベル 5) などの、トピック依存語が占めている。高レベルの単語は、トピック依存語か、またはその派生語が全体のほとんどであった。

また、低レベルの名詞は、“children” (レベル 1)、“people” (レベル 1)、“government” (レベル 1) など、トピックに関わるもの、そして動詞は“think” (レベル 1) など、質問文の形式に沿ったものが多く見られた。

これらの特徴をまとめると、質問文に出現する語彙の大半は比較的基本的な単語であり、その中に少数トピック依存語が見られるとすることができる。

4. まとめ（本研究からの示唆と今後の課題）

本研究では、英検準1級の二次試験問題の「素材」と「質問文」（2007年度から2015年度までの9年間分のデータ）について、ピクチャーカード（54枚）「素材」と「質問文」（216問）の特徴を明らかにすることを試みた。（財）日本英語検定協会が明示しているように、準1級は「社会生活で求められる英語を十分理解し、また使用することができる」程度に達しているかを測定することを目指し、二次面接試験では「社会性の高い話題について（口頭で）やりとりすることができる」かどうかを審査している。本研究の分析を通して「social」「abstract」「logical」などのキーワードを挙げるができる。また、質問文の言語的特徴としては、いくつかの表現パターンがあること、そして語彙レベルについてはトピック依存語以外はごく基本的なものであることが判明した。本稿の情報が、英検「準1級」取得やそのための指導、あるいはCEFRのB2からC1レベル以上を目指そうとする学習者や指導者に示唆を与えることができれば幸いである。

また、本稿の主目的は英検準1級の二次試験問題の「素材」と「質問文」の特徴などに関して「概観」を示すことであった。それ故、これらの特徴の更なる分析については稿を改めて論じてみたい。さらに、この研究を通して得られた知見をもとに、全国の英語教員、とりわけ自己研鑽機会が確保しにくい教員の、「英検『準1級』取得支援モデル」を今後、構築・提案してみたい。

著作権に関する謝辞

本研究を進めるにあたっては、公益財団法人日本英語検定協会に著作権に関して「英検・過去問題使用許可申請書」を提出し、当協会より許可を得た上で行った。当協会の御高配に改めて謝意を述べたい。また、質問文などの収集にあたっては、毎年発行される旺文社刊『英検準1級全問題集CD』『英検準1級過去6回全問題集』などを参照した。

参考文献

- 旺文社『英検準1級全問題集CD』『英検準1級過去6回全問題集』（2008年度版～2016年度版）。
- 岡秀夫，金子朝子，佐野富士子，遊佐典昭（2010）。「第Ⅱ部第5章 第二言語習得研究」『英語教育学大系第1巻 大学英語教育学 その方向性と諸分野』150-161。
- 達川奎三，Walter Davies，田頭憲二，山本五郎，田北冬子（2014）。『Global Issues Towards Peace: DVDで学ぶ共存社会—グローバル時代を考える』南雲堂。
- 田中正道（監修）野呂忠司・達川奎三・西本有逸（編）（2006）。『これからの英語学力評価のあり方—英語教師支援のために—』教育出版。
- 田中正道（編）（1999）。『伝達意欲を高めるテストと評価—実践的コミュニケーション能力を育てる授業—』教育出版。
- 日本英語検定協会（2006）。『英検 Can-do リスト—英検合格者の実際の英語使用に対する自信の度合い—』
- 吉島茂，大橋理枝（他）（訳・編）（2014）。『外国語教育Ⅱ 外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社。
- Bachman, L. F. (1990). *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Bachman, L. F., and Palmer, A. S. (1996). *Language testing in practice: Designing and developing useful tests*. Oxford: Oxford University Press.
- Brown, G. and G. Yule. (1983). *Teaching the Spoken Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ilyin, D. (1976). *Ilyin oral interview*. Rowley, Mass.: Newbury House.

Luoma, Sari. (2004). *Assessing Speaking*. Cambridge: Cambridge University Press.

Weir, C. J. (1990). *Communicative language testing*. New York: Prentice Hall.

_____ (1993). *Understanding & developing language tests*. New York: Prentice Hall.

Wright, A. (1989). *Pictures for language learning*. Cambridge: Cambridge University Press.

【Appendix 1】 文部科学省2014年度英語教育調査に関する新聞報道記事

(第三種郵便物認可)

中

全国の公立中・高校で、英語を教える教員のうち、英検準1級以上がそれに相当する資格を取得しているのは高校で55・4%、中学で28・8%だったことが25日、文部科学省の2014年度英語教育調査で分かった。前年度の52・7%、27・9%からそれぞれ微増したが、17年度までに高校で75%、中学で50%という政府の教育振興基本計画の目標達成は厳しそうだ。

高校55% 中学28%

教員の英検目標「合格」厳しく

文科省、準1級以上を調査

調査では、14年12月時点で英検準1級以上や、TOEIC730点以上の点数を取っていた教員の人数を調べた。

中国地方5県の英検準1級以上などを取得している教員の割合

	高校	中学
広島	71.5%	41.0%
山口	58.4	31.0
岡山	51.6	20.3
島根	48.1	22.4
鳥取	75.4	26.5
全 国	55.4	28.8

今回の調査で、実際にこうした資格を取得したか、教員がそれに相当する力があるか判断した生徒の割合は、高3で31・9%、中3で34・7%だった。調査結果は25日に開かれた中教審の特別部会で示された。

は福井49・4%、富山48・0%、東京42・6%の順。中国地方では広島が高校71・5%、中学41・0%、山口が高校58・4%、中学31・0%、岡山が高校51・6%、中学20・3%、島根が高校48・1%、中学22・4%、鳥取が高校75・4%、中学26・5%、全 国が高校55・4%、中学28・8%だった。

『中国新聞』朝刊 2015年5月26日(火曜日) 社会 (28)

【Appendix 2】英検「準1級」の質問文に使用された高頻度語彙（2007年度から2015年度まで）

順位	頻度	語	順位	頻度	語	順位	頻度	語
(1)	198	the	(52)	9	good	(108)	3	who
(2)	195	you	(53)	9	employees	(109)	3	use
(3)	87	think	(54)	9	done	(110)	3	treat
(4)	87	Do	(55)	9	about	(111)	3	there
(5)	83	that	(56)	9	Is	(112)	3	taxes
(6)	75	to	(57)	8	than	(113)	3	sports
(7)	75	be	(58)	8	public	(114)	3	services
(8)	61	people	(59)	8	enough	(115)	3	say
(9)	60	in	(60)	8	education	(116)	3	run
(10)	56	would	(61)	7	society	(117)	3	restaurants
(11)	55	what	(62)	7	or	(118)	3	relations
(12)	55	at	(63)	7	improve	(119)	3	reduce
(13)	54	were	(64)	6	they	(120)	3	products
(14)	54	picture	(65)	6	provide	(121)	3	produce
(15)	54	If	(66)	6	less	(122)	3	private
(16)	52	look	(67)	6	influence	(123)	3	own
(17)	52	Please	(68)	6	get	(124)	3	over
(18)	49	fourth	(69)	6	become	(125)	3	number
(19)	47	more	(70)	5	your	(126)	3	nature
(20)	46	thinking	(71)	5	when	(127)	3	mother
(21)	40	Should	(72)	5	time	(128)	3	men
(22)	32	of	(73)	5	system	(129)	3	many
(23)	31	their	(74)	5	students	(130)	3	local
(24)	27	children	(75)	5	schools	(131)	3	jobs
(25)	26	with	(76)	5	past	(132)	3	improved
(26)	23	on	(77)	5	money	(133)	3	help
(27)	22	for	(78)	5	make	(134)	3	health
(28)	21	man	(79)	5	lives	(135)	3	glasses
(29)	21	do	(80)	5	live	(136)	3	forth
(30)	19	days	(81)	5	husband	(137)	3	food
(31)	18	too	(82)	5	father	(138)	3	equally
(32)	18	today	(83)	5	experience	(139)	3	environment
(33)	18	these	(84)	5	cars	(140)	3	entrance
(34)	17	government	(85)	5	by	(141)	3	decisions
(35)	17	are	(86)	5	becoming	(142)	3	deal
(36)	17	a	(87)	5	Why	(143)	3	crime
(37)	16	Japan	(88)	5	Are	(144)	3	countries
(38)	15	work	(89)	4	way	(145)	3	age
(39)	15	woman	(90)	4	university	(146)	3	advertising
(40)	15	should	(91)	4	take	(147)	3	activities
(41)	15	and	(92)	4	stricter	(148)	3	Will
(42)	14	have	(93)	4	spend	(149)	3	Which
(43)	14	companies	(94)	4	pressure	(150)	3	TV
(44)	13	young	(95)	4	place			
(45)	13	parents	(96)	4	most			
(46)	12	it	(97)	4	has			
(47)	12	future	(98)	4	from			
(48)	11	important	(99)	4	family			
(49)	10	will	(100)	4	concerned			
(50)	10	much	(101)	4	company			
(51)	10	is	(102)	4	city			
			(103)	4	cities			
			(104)	4	can			
			(105)	4	between			
			(106)	4	as			
			(107)	4	Internet			

ABSTRACT

An Analysis of Test Items in the Eiken Pre-1st Grade Interview

Keiso TATSUKAWA

Kunihiro KUSANAGI

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

The purpose of this paper is to analyze test items in the Eiken Pre-1st grade interview. The Eiken Foundation of Japan (formerly STEP, the Society for Testing English Proficiency, Inc.), or Nihon Eigo Kentei Kyokai, is a public-interest incorporated foundation established in 1963 and based in Tokyo, Japan. It produces and administers English-proficiency tests with the backing of the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) and in cooperation with Japanese prefectural and local boards of education, public and private schools, and other leading testing bodies. Therefore, students are often encouraged to take Eiken English-proficiency tests, and English teachers of public secondary schools are expected to reach a threshold level of Pre-1st grade or 1st grade.

First, a brief history of Eiken is reported and the proficiency level of Pre-1st grade and the contents of its first-stage test and second-stage interview are summarized. Then, features of picture cards used for the interviews from 2007 through 2015 (academic years) are analyzed. There are 54 picture cards over the nine years and they have 216 question items in total. There are two categories to be analyzed and discussed: (1) a series of four pictures for narration performance, and (2) four question items to be asked afterwards. As for the first category, topics or themes described in the pictures are analyzed. For the second category of question items to be asked, some unique linguistic features are reported as well as popular topics or themes. The present paper has identified several key words to describe the features of Eiken Pre-1st interview tests: *social*, *abstract*, and *logical*. Successful speakers of the Pre-1st grade should not only have basic knowledge of important social issues, but also be able to speak about them logically. It has also found that interview questions have a number of featured sentence patterns and that they contain both topic-related and many basic-level vocabulary items.